

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370370

研究課題名(和文) フランス現代思想とエロティシズムの問題—ジョルジュ・バタイユが切り拓いた地平

研究課題名(英文) The french modern thought and the problem of eroticism - fields of vision opened by Georges Bataille

研究代表者

酒井 健 (SAKAI, Takeshi)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70205706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：フランス現代思想のパイオニアであるジョルジュ・バタイユのエロティシズム論を出発点にして、のちの世代の現代思想の担い手たちが展開した性の思想を検証した。三年間にわたる本研究は初年度にバタイユのエロティシズム論の解明に向かい、次年度にブランショなどのポスト・バタイユ世代の性の思想の解明に向かった。最後の三年度においては今現在活躍を続けているナンシー、キニャールといった思想家の発言に視野を広げながら、先行2世代の性の思想と合わせて、現代に有効な新たな人間論を構築した。成果は国内外の学会発表、国内外の学術誌における論文発表、さらに著作の刊行などを通して積極的におこなった。

研究成果の概要(英文)：For three years, I made a study of the french modern thought, especially sexological thought, First year, my study targeted a pioneer of this theme, Georges Bataille's eroticism ; second year, post-Bataille generation's thought of sexuality (Pierre Klossowski, Maurice Blanchot, Michel Foucault). And last year, my reseach aimed to synthesize Bataille, post-Bataille generation and contemporary sexologies (Jean-Luc Nancy, Pascal Quignard) for constructing a new anthropology.

I presented the result of this study by academic conferences both within and outside Japan, articles and research papers.

研究分野：フランス現代思想

キーワード：バタイユ エロティシズム

1. 研究開始当初の背景

バタイユおよびフランス現代思想における性の思想の総合的な研究は日本およびフランスにおいて立ち遅れていた。

(1) バタイユのエロティシズム論に関する国外・国内の研究 = 本格的な研究の立ち遅れ
バタイユ(1897-1962)の著作は多様な領域(文学、哲学、美学、社会学、歴史学、経済学、宗教学、自然科学など)に及んでいるが、エロティシズム論は彼のこうした思索活動の根底に位置し、つねにその方向を人間にとって最も本質的な生と死の次元へ導いていた。だがその受容は芳しくなく、彼の思想は死後も長いこと等閑に付されていた。原因は、彼の思索および表現の大胆さと複雑さにある。バタイユ研究も、彼の幅広い学際性が障害になって、本国フランスにおいてすら立ち遅れた。エロティシズム論となると、研究書のかたちで世に問われたのがやっと 21世紀に入ってからである。すなわち 2003 年刊行のジル・メーネ著『ジョルジュ・バタイユ:エロティシズムとエクリチュール』、2006 年刊行のアンドレアス・パパニコラウ著『ジョルジュ・バタイユ:エロティシズム、政治的想像力、異質学』が目立つ程度である。これらの研究書はバタイユのエロティシズム論を彼の活動の一面(文芸創作や政治活動、社会学)との関連で考察しているにすぎず、本研究がめざす総合的な思索者バタイユとの関係は問われていない。国内の研究動向となるとさらに遅れており、バタイユのエロティシズム論を対象にした研究書はなく、雑誌の特集号に単発の論文が掲載されている程度である。

(2) ポストバタイユ世代のエロティシズム論に関する研究 = 皆無に近い。バタイユのエロティシズム論は尖端的な思想家によって注目された。その継承・発展という点ではピエール・クロソウスキー(1905-2001)とミシェル・フーコー(1926-1984)の著作が重要である。前者はサド論(『わが隣人サド』)性の歴史的視点(『ローマの貴婦人』)身体論(『生きた貨幣』)においてバタイユに触発されながら新たな展望を開いた。後者はその晩年の大作『性の歴史』(『知への意志』、『快楽の活用』、『自己への配慮』)において哲学、権力論、歴史学の分野でバタイユを意識しつつ新たな考察を提示している。両者に関する研究は、国外、国内ともに、いまだそれぞれの思想の全体像の紹介という次元に留まっており、本研究のような先人バタイユとの関係から彼らの展開を批判的に吟味し、今日の間人間論に接続させる規模には至っていない。

2. 研究の目的

上記の背景に鑑みて、バタイユおよびポストバタイユ世代の性の思想の解明と、あらたな人間学の構築を目的にした。

本研究は、第一に、20 世紀フランスの思想家ジョルジュ・バタイユのエロティシズム

論を、彼の学際的な姿勢に沿って、総合的に解明していくことをめざした。

第二に、後のフランス現代思想の担い手による継承と発展、つまりポストバタイユ世代のエロティシズム論の新展開を明示することに努めた。バタイユは性の問題を思想の舞台で本格的に扱ったパイオニアであり、後の尖端的な思想家に大きな影響を与えた。本研究では特にピエール・クロソウスキー、ミシェル・フーコー、モーリス・ブランショ(1907-2003)、ジャン＝フランソワ・リオタール(1924-1998)、ジャン＝リュック・ナンシー(1940-)、パスカル・キニャール(1948-)らに注目し、バタイユが切り拓いたエロティシズム論の裾野の広さを開示することを目的とした。

さらに第三の目的として、今日的な視野に立ち、軽薄に捉えられがちな性の問題がどれほど深く現代人のテーマたりうるか、バタイユおよびポストバタイユ世代の考察から、新たな人間論の礎を構築していくことをめざした。

3. 研究の方法

研究を三年度に分けて、初年度をバタイユ、次年度をポストバタイユ世代、最終年度を二つの年度の研究の統合と新たな人間学の構築へ向けた。関係研究論文の収集と解説、分析、そして個別テーマを横断する広い視野の設定を方法として採用した。

本研究は、研究代表者酒井が単独で3年間にわたっておこなった。この3年間の研究計画は、本研究が掲げる三つの目的に対応して組まれた。すなわち初年度はバタイユのエロティシズム論の総合的な解明、次年度はポストバタイユ世代のエロティシズム論の明示、3年度目は新たな人間論の礎の構築に充てられた。研究の方法としては、当該の思想家(バタイユ、クロソウスキー、フーコーら)の原典解読から出発し、毎年度、学会発表、紀要論文の発表をこなす手順をとった。そして最終的にはこれら各年度の成果を単著にまとめ、その思索の経緯を世に問うことをめざした。

4. 研究成果

国内外の学会発表、シンポジウムの開催と発表、論文発表、研究書の刊行などを通して成果を広く世に問うた。

国際学会での発表としては2014年11月にフランスのストラスブール大学文学部で開催された「一般・比較文学フランス学会」第39回国際大会で発表をおこない、バタイユと、同世代のドイツの文筆家エルンスト・ユンガー(1895-1998)の思想および文章表現に潜む戦争とエロティシズムの関係を解明した。また2016年1月にフランスのパリ大学ナンテール校で開催された国際学会「バタイユ、ブランショ、クロソウスキー、限界体験の問題」に参加し、バタイユとブランショ、キニ

ヤールにおける性の思想を「夜」というテーマでまとめる発表をおこなった。なお、この発表原稿は査読を経たのち、フランスの大学出版社から刊行の運びになり、目下印刷中である。

国内においては2015年12月に法政大学市ヶ谷キャンパスにて公開シンポジウム「マテリアとしての記憶」を主催し、司会進行役をつとめるかたわら、基調講演「ヒロシマの動物的記憶」をおこなった。このシンポジウムは、記憶の底に潜む体験を拭いさらぬ物質と捉えて、これにこだわる思想家と詩人を取りあげて論じる試みであった。バタイユ、ボードレー、ベンヤミン、原民喜などに注目した。酒井の基調講演では、バタイユの論文「ヒロシマの人々の物語」をもとに人間の欲望と世界のエネルギー流の重なりとその悲惨な結果を記憶というテーマで解明した試みである。他の発表者から貴重な指摘を受けるとともに、会場からも内容の深い意見をいただき、きわめて有意義な会となった。

2016年5月には「法政哲学会」の大会において発表「バタイユとインファンティアの問題」をおこなって、バタイユの欲望論とフロイトの精神分析、およびフランス現代思想の重要な担い手ジャン＝フランソワ・リオタールの思想との関係を検討した。さらに同年7月には表象文化論学会第11回大会において発表「神話系譜学、ニーチェ、バタイユ、ナンシー」をおこなって、今日にまで至るフランス現代思想の流れを神話を軸に解明した。エロスの欲望を、広い視野に立って考察した試みである。

また研究の成果を一般の人々に伝えるために書店でのトークショーも積極的におこなった。東京都新宿区の書店「神楽坂モノガタリ」において「文学者と恋愛、バタイユ・漱石・カフカ」を2015年12月におこなった。これは、エロティシズムの問題をバタイユだけでなく、広く日本やヨーロッパの作家に敷衍して語る試みであり、たいへん好評だった。さらに2016年11月にも拙著『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』への刊行記念のトークショーを「神楽坂モノガタリ」でおこない、エロティシズムからの深い人間論へ至る視点を紹介した。こちらも一般の参加者から好意的な反応をいただいた。

本研究の最終年にあたるこれらの発表は性の問題を新たな人間学に昇華させていく流れのなかでの試みであり、その思考の取り組みは単行本の拙著『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』(2016年9月、青土社)の刊行におおいに寄与したと言える。この著作は、サド論など性の問題に直接的に関わる論文から広く人間の非理性の闇を問う論考へ思考の発展をみせたもので、新たな人間学の構築という本研究の最終目標にかなう試みだと言える。

ここでいう人間学とはそれまでの人間中心の人間考察とは一線を画し、人間とは言い

切れないこの世界の物質的な力、流れ、広がり人間とのつながりを基本に据えて、人間の思考と活動を捉え直す議論である。既存の人間観、とくに近代の人間像へ反省と視点の転回を迫る立論と言ってよい。バタイユのエロティシズムの射程を新たな人間論へ発展させる野心をこの拙著では表現し、広く世に問うた。

ともかく3年間の間には、専門家を対象にした学会発表を国内と国外においておこなう一方で、所属の法政大学でバタイユ関連の一般公開のシンポジウムを開き、都内の人文系の書店でフランス現代思想関連のトークショーを繰り返し開くなど、研究の成果をできるだけ多くの日本人へ伝達することに努めた。

バタイユおよび彼以降のフランス現代思想が開拓した性の思想の根源性と深い人間性を考察した本研究は、学会発表から論文掲載、図書の刊行、公開シンポジウムなど、研究担当者酒井の力量の及ぶ全範囲で、成果発表が試みられ、書評などから良き反響を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

酒井健 Pensées de la nuit : Georges Bataille, Maurice Blanchot et Pascal Quignard、Bataille-Blanchot-Klossowski、Presses universitaires de Paris-Nanterre、査読有、第1号、印刷中、2017年中に刊行予定

酒井健、バタイユと「見出された幼年」 インファンティア概念への一視角、法政哲学、査読無、第13号、2017、13 - 24

酒井健、神話表現論の系譜 - ニーチェ、バタイユ、ナンシー、言語と文化、査読無、第14号、2017、1 - 11

酒井健、ゴシックとは何か - 地方から都市へ 聖なるものの流入、精神医学史研究、査読無、第20巻第1号、2016、26 - 31

酒井健、最期のイエスの叫びとジョルジュ・バタイユの刑苦、言語と文化、査読無、第13号、2016、1 - 11

酒井健、夜の歌麿 - ブランショ、バタイユ、キニャールから、ユリイカ、査読無、第40巻第20号、2015、120 - 134

酒井健、Georges Bataille Le cheminement de l'érotisme、Alkemie Revue semestrielle de littérature et philosophie、査読有、第15号、2015、137 - 151

酒井健、La guerre et l'expérience intérieure - l'écriture fragmentaire de

Georges Bataille (2)、法政大学文学部紀要、査読無、第 70 号、2015、31 - 44

酒井健、ジョルジュ・バタイユと哲学 - 『ドキュマン』の時代へ向けて、言語と文化、査読無、第 12 号、2015、1 - 14

酒井健、"Rechercher la chance" - l'écriture fragmentaire de Georges Bataille (1)、法政大学文学部紀要、査読無、第 69 号、2014、1 - 12

酒井健、幽閉の美学ーサドと修道院、ユリイカ、査読無、第 46 巻第 12 号、2014、66 - 74、

酒井健、Le sacré et la chance, Georges Bataille sur le chemin de l'athéologie、ANAMNESE、査読有、第 8 号、2014、189-200

〔学会発表〕(計 6 件)

酒井健、神話系譜学、ニーチェからバタイユ、ナンシーへ、立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市北区等持院北町)、2016 年 7 月 9 日、表象文化論学会第 11 回大会

酒井健、バタイユとインファンティアの問題、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区富士見)、2016 年 5 月 28 日、法政哲学学会第 36 回大会、

酒井健、Le regard interdit de la nuit et ses conséquences contemporaines : Bataille, Blanchot et Quignard; パリ大学ナンテール校(フランス、パリ)、2016 年 1 月 21 日、国際学会「バタイユ、ブランショ、クロソウスキー、限界体験の問題」

酒井健、ボードレールと日本の近代詩、日比谷コンベンションホール(東京都千代田区日比谷公園)、2015 年 11 月 29 日、第 9 会明星研究会公開シンポジウム

酒井健 ヒロシマの動物的記憶、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区富士見)、2015 年 12 月 20 日、公開シンポジウム「マテリアとしての記憶」

酒井健、Bataille et Jünger : comment écrire l'expérience intérieure de la guerre、ストラスブール大学(フランス、ストラスブール)、2014 年 11 月 15 日

〔図書〕(計 4 件)

酒井健、青土社、夜の哲学 バタイユから生の深淵へ、2016、310

酒井健、大池惣太郎、岡田和子、鈴木和彦、小林レント、ヒロシマの動物的記憶から、『マテリアとしての記憶』、景文館書店、2016、5 - 15

酒井健、景文館書店、魔法使いの弟子(バタイユ論文の翻訳および解説)、2015、70

酒井健、景文館書店、ヒロシマの人々の物語(バタイユ論文の翻訳および解説)、2015、62

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井 健 (SAKAI, Takeshi)
法政大学・文学部・教授

研究者番号：70205706